
賭博遊戯

ト全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賭博遊戯

【Nコード】

N5559D

【作者名】

ト全

【あらすじ】

「時任さん、あなたは今、2千万円の借金を抱えているのですよ。死んだ父親の作った借金、それを返す唯一の方法がギャンブルだった。今宵、命懸けの大博打が開始される!!!」

第一話：『借金』

「時任さん、あなたは今、2千万円の借金を抱えているのですよ」
なぜ…なぜ、こうなった。

「クス…クスクスッ」

なんだって…俺がこんな目に

数分前

「…はあ」

ため息と共にパチンコ店から出てくる男。

時任 計ときとう けい

「…負けちった、ハハッ」

特に働きもせず、暇になるとぶらぶらとパチンコ店に向かう日々。

それが彼の全てだった。

他にやる事もやりたい事もない。

そんな墮落しきった日々。

「…はあ」

ため息をつき、とぼとぼと歩く。

「…君、時任？時任 計君？」

ふと、誰かと通りすぎた瞬間、声をかけられた。

「…え？あ、はい」

そう答え、すぐに答えた事に後悔する。

自分に声をかけた人物があきらかに堅気の者の雰囲気ではないからだ。

屈強な体つきにスーツ、サングラス。

間違いなくヤクザか何かだ。

「な…なんか用ですか？」

時任が身構えるのも当然と言える。

「…我々と共に来て貰いたいんだが、どうだろう、時間、あるかな？」

(じ…冗談じゃねえ、走って逃げるしか…)

そう一瞬考えたが、すぐにその考えが消える。

「…え、我々って」

引っ掛かったのは男のその一言。

「我々さ、君を迎えに来た、時任 計君」

時任のすぐ後ろ、同じようにスーツを着た男が二人。

「…ぐっ」

「さて…着いて来て貰おうか、何…悪い話しじゃないさ」

「……………」

けっ…何が悪い話しじゃない…だ!!

「…どつぞ、こちらです」

通されたのは部屋だった。

ただの部屋ではない、豪華なのだ、それもとてつもなく。

「……………」

時任は辺りをキョロキョロと見渡す。

この部屋だけではない、ここまで来る時に乗った車も高級車、着いた先はもちろん豪邸。

その豪邸の一部屋、時任が面喰らうのも当然だった。

「…話してなんだよ、だいたい、こんな所までわざわざ連れて来る必要ねえだろ」

近くに立っている黒スーツの一人に話しかける。

「…いやいや、必要はある、あまり外で話す事じゃないからさ」

「…ならさっさと話せよ」

「落ち着け…ボスはまだ仕事中だ」

「…!?!?」

ボス？ボスだつて…

「ボスつて…この屋敷の主か？」

「…そうだ、この屋敷自体、一つの会社みたいなものだからな」

プツプツ…

そんな会話をしていると男の携帯がなった。

「…はい、…了解しました」

ピッ…

「ボスがお会いになる、さて…行くつか」

「……………」

…何がボスだ、人をわざわざこんな場所に呼び出しやがって。

文句の一つでも言ってる、そう意気込み、黒スーツの後を歩く。

コンコンッ…

「ボス…連れて来ました、時任です」

「入れ」

黒スーツのノックと中からそれに答える声。

(…え？今の声って)

いや…まさかな。

ガチャッ…

ドアが開き、部屋が見える。

奥に椅子に座り、後ろを向いている人物が居る。

(…嘘だろ)

それを見た瞬間、時任は自分の目を疑った。

「ご苦労様、あなたはもう下がっていい」

「…はっ」

丁寧に頭を下げ、黒スーツは部屋を出る。

その際、俺にだけわかるようにニヤリと笑った。

「さて…時任さん」

その人物が椅子を回転させ、顔を自分に向ける。

少女だ…まだ15歳そこらだろうゴスロリ衣装の人形のような可愛い少女。

「単刀直入に言います」

少女はニツコリと微笑む、天使のような笑みだった。

「時任さん、あなたは今、2千万円の借金を抱えているのですよ」

「…え、!？」

その後と言われたその悪魔のような言葉に、時任は一瞬、意味がわ

からなかった。

「クス…クスクスッ」

そんな時任を嘲笑うかのように少女がクスクスと笑う。

「ふ…ふざけんな！？第一…俺は借金なんてしてない」

今はまだ…だけど。

「はい、確かにあなたはしてません」

「だったら…」

「ところで先日、お父様が亡くなられたでしょう？」

突然少女が話題を変えて来る。

「あ…ああ、そうだけど…、まさか…」

「借金はあなたのお父様がお亡くなりになる前、私達に借りたものです」

「…嘘、だろ？」

「クスクスッ 本当ですよ、借用書もあります、見ますか？」

少女があらかじめ用意していたのだらう、借用書を机に置いた。

「…か、関係ねえ！親父の借金なんて、俺には！？」

借入書を覗むよいに見つめ、時任が机に両手をつける。

「払わない…、支払う義務なんてないはずだ!!」

だから…諦めてくれ。

それは時任の切なる願いだった。

「…クス、クスクスッ」

「…なんだよ」

なんで…笑うんだよ。

「時任さん…払う、払わないの話じゃないんですよ、私がしているのは」

「…ぐっ」

この…ガキ、なんて…

「…払わせる、それが取り立てってものでしょう？クスクスッ」

なんて嬉しそうな顔で、言いやがる。

「…2千万、そんな大金、俺が支払えると思ってるのか？」

「いいえ、支払いの方法はこちらで考えてあります」

そう言うと少女は書類を取り出す。

「一つは毎月分、コツコツ働いて返す方法、そうですね…月に最低でも10万は支払いしていただくとして…」

時任が書類を見る、来年、再来年の西暦とその横に借金の額。

「…ふざけんな」

それを見て時任はすぐに声を出した。

「…なにか？」

「なにかじゃねえ…、なんだよ、コレ、まったく…全然減ってねえじゃねえか!!」

そう…減っていないのだ、借金の額は、例え10年後でも全然。

「クスツ…、それは当然でしょう、借金には金利というものがあるんですから」

「…暴利だろ、こんなの!!」

こんな条件を受ければ…一生生かさず殺さずの飼い殺し状態になる。

「…もう一つは？」

「…はい？」

「ちつき…一つは、って言ったよな、他にも案があるのか？」

「…クスクスクスツ　なかなか鋭いですね」

時任のその言葉に少女は嬉しそうに微笑む。

「ありますよ、もう一つの提案、それも借金を0にできるだけじゃなく…プラス、何百万、何千万とプラスになる提案が」

「…なんだよ、ソレ」

「クスクスツ　聞きたいですか？」

「もったいぶるな！早く教えやがれ！！」

「賭博…つまりはギャンブルですよ」

「…な」

なん　だって？

第二話：『提案』

「クス…クスクス」

今 このガキ、なんて。

「好きですか？ギャンブル」

ギャン…ブル？

「…馬鹿な!!」

「…どうかしましたか？」

「元手もないのにギャンブルなんざ出来る訳ねえだろ!!」

「ええ…ですから、資金はこちらで用意します、もちろん…借金とは関係無く」

「…え？」

その言葉に時任は自分の耳を疑う。

「借金と関係無しで？マジ？」

「クススツ…本当ですよ、時任さんは裏カジノ等はご存知ですか？」

「そりゃあ…そんなのがあるだろう、くらいには」

「先日、オープンしたばかりの面白いカジノ施設があるんですよ、
どうですか?」

少女の問いに時任は沈黙する。

「…質問がある」

「…なんなりとどうぞ」

時任の睨むような視線、しかし少女はすました顔で返す。

「ギャンブルの内容についてだ、いったい何をやるんだよ、ポーカーか? 麻雀か? 丁半博打か?」

「ああ、その事ですか、ご安心を…それはあなたの自由です」

「え? 自由って…選べるのか?」

その時任に答えるように少女は引き出しから封筒を取り出し、机に置く。

「こちらの紹介状、これを係の者に見せればあなたはその博打に参加出来ます」

「……………」

手に取って中を開こうとする。

「クス…中を見た場合は無効になるから、気をつけてね」

「…そうかよ」

そう言われ、紹介状を机の上に戻した。

「良いですか？これを係の者に見せてギャンブルに参加、資金はもちろんこちらが持ちます、ただし…」

少女は指を一本だけ立て

「この紹介状は一度使うと効力がなくなります」

「チャンスは…一度、ってか」

「クス、クススツ 一度でも充分でしょう、資金は他人の金、勝てば借金がチャラだけではなくプラス」

少女は紹介状を時任に向け、差し出す

「つまり、皮肉にも今のあなたはピンチであると同時に希望、チャンスを手に入れた」

「…希望、だつて？」

「そうですね？毎日を墮落に過ごし、暇になればパチンコ、スロットといったギャンブル、これはそんな日々を変えるチャンス」

「…てめえ」

尾行…してやがったな、何日か前から。

「…負けたらどうなる?」

「……………」

時任のその言葉に少女は急に口を閉じた。

「さっきから勝てば、勝ったら…って話ばかりだ、俺がギャンプルをして…負けたらどうなるんだよ?」

「クスツ 負ける事前前提なの?」

「!?!、てめえ…」

そりゃあ…お前はこんな場所でそんな事言える立場なんだ、わからないかもしれない。

けど…重要なんだよ!俺らにとっちゃ、それが!!

「…どうなんだよ!?!」

「…ご安心を、負けたら当初の予定通り、働いて地道に少しずつ返して貰う事になります」

「……………」

「さて…どうしますか?この紹介状、使わないなら破いてしまえますが?」

「…てめえ、悪魔かよ」

「クス 悪魔なんてとんでもない…、時任さん」

「……………クソッ!」

時任は引つたくるように机の上の紹介状を取る。

「…やる!やりゃあいんだろ!」

「…では、この話し、受けるんですね?」

「…ああ」

時任が唇を噛みしめ、頷く。

「では…こちらの契約書にサインを」

「……………」

時任は少女の出した契約書を良く見て、サイン、そして拇印を押した。

「…これで終了です、日は今週の日曜日、夜にこちらから迎えの者を寄越します」

「ああ、わかった」

「時任さん」

部屋を出ようとする時任に少女が声をかける。

「幸運を祈ってますよ」

「…けっ!」

バタンツ

乱暴にドアを閉め、時任が出ていった。

ガチャツ

その後、黒服の男が部屋に入ってくる。

「今車で送り出しました」

「ご苦労様」

「しかし…クク、ボスも人が悪いですね」

「…何がです?」

「ギャンブルで負けた場合の説明、ですよ、働いて、地道に返せばいい…」

「あら?別に嘘を言った訳じゃないでしょう?」

「何をして働くか…そこが重要でしょう?」

黒服はニヤリと口元に笑みを見せる。

「あんなガキが勝つ事なんて不可能、違いますか？」

「クス… それはまだわからないでしょう？」

「…え？」

「何が起こるかわからない…それがギャンブルですから」

黒服の男なそう答え、少女は愉悦の笑みを浮かべる。

「クス…クスクス」

日曜日、夜

「……………」

時任は黒服の男達に連れられ、車の中に入る。

と同時に目隠しをさせられた。

「…なんだよ？コレ」

「いや…安心したまえ、何かしようという事じゃない、ただこれから連れて行く場所は何しろ非合法、念には念を入れて…」

車を運転する男の声だけが耳に届く。

そのまま車を走らせ、30分はたっただろうか。

いや…正確にはもっと短かったのだろうか、目隠しをした時任にとつてそう感じた。

キイツ…

(?、止まった…着いたのか)

「さて…目隠しを取るのもう少しだ、とりあえずついて来て貰うぞ」

黒服に誘導され、目隠しをされたまま歩かされた。

「…まだかよ?」

耳元でなにかざわめきが聞こえる。

「…そうだな、ここいらでいいだろう、目隠しを外してやれ」

男の支持で部下の黒服が時任の目隠しをといた。

「…っ」

目隠しを取った瞬間、眩しい光が時任の目をおおう。

熱気…それはまるで熱気の渦。

ここは裏カジノと呼ばれる場所なのだ。

耳元で聞こえたざわめきが人々の歓声や悲痛の声だった。

「……………」

初めての事に啞然とする時任。

「さて時任くん、入り口でボディチェックをし、中に入る、あとはその紹介状を使い一度、一度だけ好きなギャンブルに挑戦出来る。」

最終的なルールを黒服が確認する。

「…ああ」

「一応は期限をつけさせて貰おう、紹介状の期限は本日限り、日が変わったらその紹介状は無効だ」

「…は？そんないきなり」

「いつまでもうじうじと悩んで挑戦しない奴が居るからな、何…今の時刻は夜九時半、まだ時間はあるさ」

黒服はそう言い、腕時計で時間を確認する。

「さあ…行きたまえ」

「……………」

黒服に促され、時任は入り口に向け、歩き出す。

めくるめく…ギャンブル、勝負の入り口へ

第三話：『旧友』

「…失礼します」

入り口にて、このカジノの店員だろう、男にボディチェックを受ける。

「…OKです、お通り下さい」

「…ああ」

入り口から中に入る、まず広いフロアに出た。

が、タバコを吸う者が居るくらいでギャンブルの出来そうな場所は無い。

「…休憩室、みたいだな」

中央にあるエレベーター、おそらく、コレに乗るのだろうか。

その横には案内板があった。

「総合賭博カジノビル…【賭博遊戯】？」

どうやら階層事に様々なギャンブルがあるようだ。

「…ギャンブル、か」

問題は…何をやるかである。

(さいころ系やルーレットなんかは論外、人生をかけた勝負…運任せでやっていい訳ない)

だとすれば…多少は戦略の練る事ができる麻雀、花札辺りを狙うべきか。

「…こんばんは、時任さん」

「…！？、お前」

そんな時任に話しかける人物。

黒服を従え、ゴスロリのドレスのような服を着た、長い黒髪。

ボスと呼ばれたあの少女である。

「俺を監視しに来たのかよ？」

時任は少女に対し、身構える。

「まさか…そこまで暇じゃありません、私用ですよ、ギャンブルの」

「……………」

ギャンブル…こんなガキが、やるのか？

「どつですか、ここは？」

少女はニッコリと時任に向け、微笑みかける。

「…こんな大規模な賭場が堂々と経営できるなんてな、警察も目をつむってんのか？」

「…クス 目をつむるところか、上の方達なら来ますよ、たまに」

「世もすえだ…」

「それで…どのギャンブルに挑戦ですか？」

少女は案内板を見ながら問いかける。

「期限は今日、日付の変わるまで…、早く決めた方がいいですよ」

「…けっ、んな事はわかってんだよ」

しかし…簡単に決める訳にもいかないのだ。

これが今、時任に残された最後のチャンスなのだから。

「……………」

なんとなく案内板を順に見ていく。

『オリジナル』、その項目が目についた。

「オリジナル…？なんだ？オリジナルって…」

「…クスクス それがこのカジノの面白い所です、沢山ありますよ、他には味わえないオリジナル、変わったゲームが」

「変わった…って、ギャンブル…なのか？」

「…あら、大金、もしくはそれに見合った『何か』、それを賭けるのならそれがどんなルールでも立派なギャンブル、でしょう？」

「……………」

「例えばチンチロ、こちらのできる事と言えばさいころをふるだけでも…それだけで数千万という金が動く場合もある」

「…それがギャンブル、って事か」

「何かを失うリスクを負うからこそそのギャンブル、どんなゲームであれ、リスクがあれば震えるほど面白くなる、違いますか？」

「……………」

少女の話しを聞く時任は啞然となる。

(このガキ…)

「…クス 行くんですか？この階層に」

「…馬鹿な！無理に決まってるだろ、そんな得体の知れないギャンブルなんざ…！」

「まあ…私はどっちでもいいんですけどね」

少女は黒服を従え、再び歩き出した。

「では時任さん、再びお会いできるのを楽しみにしてます」

「…え？」

なんだ…今の言葉、どういう意味なんだ？

時任にそう考えさせる間も無く、少女は黒服とエレベーターに乗った。

「クソッ、しかし…変わったギャンブルか」

そりゃあ…運の要素がまったく無いギャンブルなんてないだろうが…。

狙うなら…それだ、運ではなく戦略、勝利への算段がつけるギャンブル。

「そんな都合の良いギャンブル、ある訳ない…か」

チンッ

エレベーターがこの階に到着する。

「…行くか」

ここに居ても何も始まらない。

エレベーターが開き、それに乗ろうとする。

「…時任？時任じゃないか！！」

「…あ？」

すると中から若い男が顔を出した。

「俺だ、山倉！高校ん時、同じクラスの」

「山倉…って、お前、なんで…ここに？」

まさか…こんな場所に入りにするほどの大物になったのか…？

「…あ、その…、それが…だな、借金、作っちゃって」

恥ずかしがりながらも山倉は答える。

「…え？」

借金？

借金…だって？

『まさか…そこまで暇じゃありません、私用ですよ、ギャンブルの』

あのがき…まさか

まさか

「…なあ、山倉、お前、もしかしたら、紹介状、とか…貰ってないか？」

「ああ…貰った、それを見せてギャンブルに参加出来るって言われて…」

「!?!」

クソッ!!

「そうかよ…そういう事かよ」

今にして思えば…変だった。

他人の金でギャンブル、勝てば自分の金に。

こんな都合の良い話し、ある訳ない。

そして…わざわざ日時を指定したって事は。

「…俺もだ」

「…え？」

「俺も…お前みたいに借金からここに来た、紹介状を貰って」

「…そうなのか？」

「…たぶん、それは俺らだけじゃない、他にも…居る!俺達と同じようにここに来た奴ら…」

チキシヨウ…

なんだよ…コレ…!

賭けてやがる…奴ら、俺達を使って。

人をコマかなんかみてえに…。

ギイ…

この裏カジノの別室。

極限られた者以外は入れない場所。

その部屋に少女は堂々と入っていった。

その部屋に居る者達は今、会場でギャンブルをしている成金の金持ち達とは別物。

一言で日本の経済をも動かせる者達。

「おやおや…お嬢ちゃんの出走馬はずいぶんと遅い到着じゃないか」

大人達に混じって一人、一言でいうなら場違いな存在とも言える。

時任にここを紹介した少女がいた。

「…状況は？」

「ククク…ぼつぼつと数人の脱落者が出てきた」

「脱落者は三沢、島岡、山倉、武部…、この四人は話しにならないな」

「さて…嬢ちゃんの出走馬、時任…だったか？彼はどうかの」

モニターには時任の顔が映し出される。

「…ん？彼と話してるのは？」

「…山倉だな、俺がせっかく出走させてやったというのに、使えないクズが」

「…は？」

山倉の話しを聞いた時任は思わず声をあげる。

「だからな…その」

「負けたって…使っちゃまったのか？紹介状」

「俺はお前より先に来てんだよ、そりゃあそつだろ」

(…そりゃあそつだろって)

もつと後悔しろよ…！

負けたんだぞ…最後のチャンスで。

「山倉、お前、大丈夫だったのか？負けて」

「大丈夫だった…って、どういう意味だ？」

「だから…その、黒服の奴らに捕まえられたりとか」

「…何言ってるんだよ、そんなんなったら今ごろこんな所に居ないって」

「…そうか、そりゃあそつだよな」

良かった、と時任は一瞬思った。

例え負けたとしても、ノーリスクでこの賭場を出る事は出来る。

(…！？、俺は馬鹿だ！何安心してやがる)

しっかりしろよ…負けたら終わりだろ！

負けたら借金を返す為に働く日々、それが確定する。

だから…勝つ、勝つしか道はない。

「…なあ、時任、俺が負けたギャンブルだけど、お前、やってみないか？」

「…は？」

「仇をとって欲しいんだよ…、俺の」

「んな事言われても…ダメだ、俺は自分で選ぶ」

当然だ…、人任せで選べるものではない。

「…時間も限られてる、悪いがそろそろ行かねーと」

時任は山倉と別れようとエレベーターに向かう。

「…待て！話しを聞け」

「…あ？」

が、山倉が時任の肩を掴んだ。

「…そのギャンブルだがな、運任せみたいだな、完全な運否天賦じゃない」

「…何！！」

「戦略…、これが一番必要なギャンブルなんだ」

「……………」

確かに…俺はそういうのを探していた。

「しかもこのギャンブル、勝負するのは客とこのカジノではなく、客と客、カジノ側のイカサマの心配もない」

「山倉…、お前、なんのギャンブルをやったんだ？」

「figureカード…、このカジノオリジナルのギャンブルだ」

「…クツクク!!」

「カッハハハハ!!」

モニターを見る者達が笑う。

「figureカードか…、ククク、お嬢ちゃん、あんたの出走馬も脱落だね」

「やれやれ…運任せのギャンブルならまだ少しは可能性があったものを」

「……………」

口々にそう言ってくる者達を無視し、少女は画面を見る。

「…クス」

そして…クスクスと笑いだした。

「…さて、時任さんの戦略、見せて貰いましょうか」

第四話：『開始』

「時任 計様ですね、この紹介状は一度使用すると効力を失います、よろしいですか？」

「…ああ」

「では…あなたの借金の総額、2034万、これに上乗せさせた2500万を賭け…figureカードの登録を完了しました」

頭を下げ、黒服が紹介状を受けとる。

「…どうぞこちらへ」

そのまま登録は控え室のような場所に通された。

「……………」

ついに…来ちまった、もう後戻りは出来ない。

タバコを吸う、手が震えている事に気付いた。

「…何やってんだよ、落ち着け!!」

「…クツクツク」

「…だ、誰だ!!」

「いや…悪い、脅かすつもりはなかった」

一人の男が控え室に入って来る。

その手にはアタッシュケースがあった。

「あんだ…紹介状持たされて来たもんか？」

「…！？、なんで」

「ククク…わかるわかる、バレバレだ、挙動不審」

「…けっ」

「考えてる事顔に出るタイプ、向かない向かない、このゲームには」

男は時任を馬鹿にするように笑う。

「んだと…そんなのやってみねえとわかんねえだろ！！」

「ククククク…わかるんだよ、長くやってれば、それがな」

ゴトツ…

男がアタッシュケースを机の上に置き

「…え？」

カチャ…

アタッシュケースを開く。

(…お、おおおおー！)

そこには札束、ぎちぎちにおさめられた万札。

「ククク…ここにあるのはまだほんの一部だ」

アタッシュケースから札束を取り出しながら、男が話す。

「俺はこのゲームで一億稼いだ」

「…なっ!?!」

「だから…わかる、お前は向かない」

パチンツ…

いくつかの札束を取り出し、ケースを閉じる。

「2500万…こんくらいか」

(…え?)

2500って、その金額は。

「ああ…名前、まだ言ってなかったな、石居だ、次、お前と勝負するな」

「!?!、あんたが…」

「クックク…、だから尚更勝てない、可哀想にな」

「…ぐっ」

ガチャツ…

その時、ドアが開き、黒服が入ってきた。

「時任様と石居様ですね…、準備が完了しましたのでどうぞ、こちらへ」

「さて…そういう事だ、残念だったな」

「……………」

石居は時任の肩をポンと叩き、先に部屋を出ていく。

「…ククク」

ゆっくりと後についていく時任の口元に笑みが見えた。

（知ってんだよ…こっちは、お前の事を、お前が潰した山倉から聞いた）

まず…控え室で相手に動揺を与えようと接触してくるってな。

（所詮ははったり…、惑わされるかって）

黒服に案内され、狭い通路を進んでいく。

「では…石居様はこちら、時任様はこちら側から進んで下さい」

「…ああ」

通路は途中で2つに別れ、時任と石居は別々に進まされる。

通路の先　光が見えた。

ガヤガヤ…

「…こりゃあ」

通路を出るとそこは周り、壁が透明のボックスの中。

中央にはテーブル、その左右に台。

ボックスの外では観客達が集まっている。

「…山倉」

その中には山倉の姿もあった。

「勝てよ…時任」

「…ああ」

「おやあ…お前は確か、山倉君、だったか？」

反対側から石居が余裕顔で入って来た。

「…石居」

「時任君、こいつはな…、俺に負けたんだよ、借金846万の上乗せ、900万賭けて…な」

「…借金845万？」

「お前の借金は2000万以上か…、何やらかしたんだ？」

「別に…俺じゃねえし、親父の借金」

「クク、それは可哀想に…、が、勝負は別」

「……………」

お互い睨み合いながらテーブルを挟み、椅子に座る。

「では…石居様」

「…わかってる」

ドサツ…

(なっ…)

テーブルの横にある台に次々と札束が置かれ、それを黒服が数える。

「確かに…2500万、確認しました」

(すげえ…すげえ！)

2500万…勝てば、獲得出来る。

台上置かれた2500万に時任の目は釘付けになる。

無理も無い、初めて見る大金、それがそこにある。

(…クツクク、大金を見れば目の色が変わる)

わかりやすいな…カモは。

「では、時任様はこちらを」

対する時任側の台上置かれたのはただ一枚。

あの少女が渡したギャンブルの挑戦権ともいえる紹介状。

(これ一枚が…2500万の価値になるって事かよ)

「…では、お互いに賭け金が出されましたのでカードを配ります」

黒服が時任、石居にそれぞれ5枚のカードを配る。

裏側は全く同じ

表には

【1】・【2】・【3】・【4】・【5】

と、単純に数字が印刷してある。

「では…これよりfigureカードの説明を開始します」

(このゲームのルールは山倉から聞いて来た…)

お互いに【1】～【5】までのカードを持ち、自分が出したいカードを一枚決め、顔の横まで上げ確認する。

そしてそれを中央のテーブルに付け、開けた時に数字の大きい方の勝利。

つまり数字的にいって

【5】 < 【4】 < 【3】 < 【2】 < 【1】

の強さとなる。

ただし、【1】については例外で【1】は【2】～【4】には負けるが【5】に勝つ事が出来る。

カードは5枚、先に三勝すれば勝ち。

「この勝負での決着で先に二勝した方を勝者とし、お二人共、よろしいですか？」

「もちろんだ…」

「…ああ」

「では…これよりfigureカードを開始します!!」

『うおおおおお！！！』

黒服の合図、それと同時に観客達の歓声。

figureカードが、開始された。

第五話：『数札』（前書き）

『figureカード・ルール』

・お互いのプレイヤーは各々、【1】〜【5】までのカードを手札として持つ。

・その中から一枚カードを選び場に伏せ、開いた時に数の大きい方が勝ち。

・基本的な強さは【5】 < 【4】 < 【3】 < 【2】 < 【1】だが例外として【1】は【5】にのみ勝つ事が出来る。

・カードは五枚なので先に三勝すれば勝利は決定、同じカード同士では引き分け扱いになる。

・最終的な決着はこのゲームで二勝する事、引き分けの場合は次戦へ。

第五話：『数札』

開始される figureカード。

「……………」

時任は五枚のカードをバラバラに手に持つ。

この勝負…一見してみると運否天賦だがそうじゃない。

相手の出すカードを読む心理戦。

それに対し、自分が出すカードを選ぶ戦略。

例えば【2】と【4】のカードが場に出されたとする。

当然、【2】を出した方が負け、【4】の方が勝つ。

しかし…【4】を使ってしまった方の手札は【1】【2】【3】【5】

【2】を使って負けた方の手札は【1】【3】【4】【5】

と、後々に有利な結果になってくる。

つまり…理想としては相手が【3】の時に【4】、【4】の時は【5】とカードを出せていけるのがベスト。

ただし…【1】に関しては別。

【5】に勝てる切り札と言えるがそれ以外のカードが相手では大概負ける。

【1】と【1】の引き分けはあるだろうが…。

「……………」

時任は少しカードを見つめ

スッ…

場に【3】のカードを提出、伏せて置く。

(とはいえ…まだ流れの見えない一枚目、これで)

チラリとまだカードを思案している石居を見る。

「…さて、クッククク、どうするか」

だが…

「…ごうか？いや、こっちか」

石居はぶつぶつと喋るだけでカードを出す気配が無い。

「…おい」

たまらず、時任の方が声をかけた。

「え?」「早くしろよ!俺が出してから結構たつぞ」

「ククク…わかってねえ」

怒鳴る時任に対し、石居は不敵に笑う。

「…あ?」

「お前は勝負つてやつを何もわかってねえ…、俺達は今、一万二万のシヨボい博打をやってる訳じゃない、2500万だ…、そりゃあ慎重にもなるさ」

「…言ってる!流れも見えない最初の一枚なんてまだ心理も戦略もねえだろ!」

「クク…クツクツク、いや、案外そうでもないんだぜ、それが」

「…あ?」

「…そうだな」

石居がすでに場に伏せていた時任のカードを指差す。

「お前の出したカードだが…、十中八九、【3】だ?違うか?」

「!?!?」

な

な

こいつ…なんで。

「クツクツク、クク…では、俺はこれにするか」

石居が手札からカードを選択、場に伏せる。

「では…お互いのカードをオープンして下さい」

黒服の声と共に石居が伏せたカードを開ける。

石居のカード…【5】

「…ぐっ!」

「ククク…さあ、どうした、カードを開けないのか?時任君」

「…くそっ!」

時任、【3】のカードを開く。

時任【3】 石居○【5】

「クツククク…まずは一勝、といったところか」

「イカサマだろ!」

時任が立ち上がり、テーブルを叩いた。

「あ？」

「カードに何か細工でもしてやがるな！！」

「…ククク、クツククク！！」

「なんだよ…何笑ってやがる」

「イカサマなんてとんでもない、ただ…わかる、このゲームの熟知してればな」

「…ふ、ふざけるな！そんな事言って」

「まあ落ち着ついて座れ、特別にアドバイスをしてやろう」

「…アドバイスだと？」

「この【3】はな…初心者、このゲームを初めてする者が一枚目に出す確率が最も高いカードだ」

「なっ…」

「当然…後々の事を考えれば勝負の鍵といえる【1】と【5】は出しにくい、【4】は手札に強いカードを残しておくといけないという不安から、最後の【2】は初戦から一敗は避けたいという恐れから…、つまり…だ」

石居が時任の出した【3】のカードを指差す。

「そこから最終的に選ばれるカードは【3】だ、理由は簡単、五枚の中で中間だからだ、一番出しやすい」

「…ッ!」

クソッ…クソ、クソッ!!

「わかるか?これが俺とお前の経験の差なんだよ」

「……………」

時任、figureカード、初戦、一枚目は負けからのスタートとなった。

第六話：『判断』

時任 figureカード、一枚目は負けから始まる。
が。

(…流れは悪くない)

時任はそう考えた。

今相手が出したカードは【5】

【5】はこのゲームでは【1】以外の全てのカードに勝てるのだ。

そのカードが自分の【3】に勝った、つまり勝敗では【5】の勝ちだが【3】で【5】を潰したといった方がいい。

これにより時任のカードは

【1】 【2】 【4】 【5】

対する石居は

【1】 【2】 【3】 【4】

と…、一敗したとはいえ状況は多少時任が有利なのだ。

(!？、そういえば…)

石居は俺の出したカードが【3】とわかっていた。

わかっていたなら…そこは【4】を出さないか？

つまり、だ。

(…ハツタリだ、口ではいろいろ言っても不安、だからほぼ確実に勝てる【5】)

つまり…俺の動揺を誘うのが狙いか？

「では…二枚目の選択を」

黒服の声に思案していた時任が目線をカードに戻す。

(相手は【5】のカードを使った)

つまり…今、俺が【4】を出せば最低でも引き分け、負けはない。

だが…石居もそれに気付いているはずだ。

【2】、もしくは【1】のカードでこっちの【4】を潰すはずだ…。

様々な考え、イメージが時任の頭をよぎる。

考えろ…戦略、勝利を計算できるギャンブルを望んでたんだろ、俺は。

(…俺が奴なら、一敗した相手は今、勝利に向けて焦ってるって考える)

そりゃあ、実際そうなんだが…、そんな負けた奴が次に出すカード

は【5】か【4】の強カード。

たぶん…石居の奴もそう考えているはずだ。

と、なると…出して来るか？【1】か【2】を。

「……………」

スッ

時任、【2】のカードに手をかける。

(…これなら…最低でも引き分け)

それを場に出そうと思った瞬間だった。

「!?!」

時任の動きが止まった。

(…いや、待て、そう簡単にいくか?)

危険じゃないか…、この【2】

奴、石居は…このゲームを熟知していると言った。

この場合…【2】をここで出すのを誰もが考える。

それに対し…石居が何もしてこないはずはない。

(だったら…)

勝負をするなら…【4】か【5】

「……………」

スッ

時任…【5】のカードを場に提出した。

(…なら当然、勝負するに決まってるだろ!!)

「…さて」

石居もカードを場に伏せる。

「それでは…オープン」

黒服の声と同時に、二枚のカードが開かれる。

時任は【5】

石居は【4】

時任【5】 石居【4】

「…ぐっ」

石居が少し焦りの表情をみせた。

(…やった！予想通りに)

【4】の相手に【5】のカードで勝利。

言ってみれば一番ベストなパターンである。

【5】を出した理由は石居からすれば【4】で引き分けも狙う事ができるからである。

これで一勝一敗、時任の残りカードは

【1】 【2】 【4】

石居は

【1】 【2】 【3】

と、カードの強さでは僅かだが時任に分があるのだ。

(…いける！残りのカードでなんとか二勝出来れば)

カードを見つめる時任。

「…あ！」

次の瞬間、ある事に気付いた。

「ククク…どうやら気付いたようだな」

石居が嬉しそうに笑う。

時任が見るのは【1】のカード。

【1】は【5】にだけ勝つ事ができる。

その【5】をもつお互いに使ったのだ。

つまり…今、この【1】は相手が【1】を出す時以外は必ず負ける。
必敗のカード。

「このfigureカード、【5】のカードを通せばほぼ二勝出来る、最初…【3】のカードとわかってても【5】を出したのはその為だ、理解したか？」

そう解説し、得意気に笑う石居。

「…ならあんだ、見誤ったな」

その石居に、時任が言葉を返した。

「…なに？」

「俺も今【5】で一勝した…、それもあんだのカードは【4】だ、残りのカードから見て有利なんだよ、俺が!!！」

「…ククク」

「なんだよ…何が可笑的い!!！」

「いや…余りに甘い考えでな、お前の言ってる事は単なる希望、こうなって欲しいという願望と似たようなものだ」

「……………」

こいつ…何言ってるやがる。

「クッククク…認めよう、確かにカードの強さでは僅かながらお前が有利だ、…が！このゲーム、そんなものはすぐに崩れる！！」

そう…有利と言っても二人のカードの違いは【4】と【3】だけなのだ。

「では…三枚目だ、選ぶとしよう」

「……………」

時任…三枚目のカードの選択。

スッ

手札から【1】のカードを場に伏せる。

理由は先ほど【1】のカードの弱さについて石居が話したからだ。

その石居がまさか直後に【1】を出すとは思わないはず。

「…俺はコレにするか」

石居、場にカードを伏せる。

「それでは…オープン」

黒服の合図で同時にカードを開けた。

時任は【1】

石居は【2】

時任【1】 石居【2】

「…ッ！」

「ククク…これで二勝一敗か、いよいよ後がなくなって来たじゃないか」

これにより勝負は4枚目のカード選択に移る。

時任のカードは

【2】【4】

石居のカードは

【1】【3】

そう…カードの強さでは時任が有利なのだ。

が…負ける、組み合わせ次第では負けもある。

この4枚目のカードの選択は実際、最終選択みたいなものだ。

5枚目の勝負は残ったカードが自動的に5枚目の選択カードになる。

(…考える、この二枚のカード、どう使う)

組み合わせ的にこちらが勝つのは

時任【4】 石居【3】

時任【2】 石居【1】

コレ、出したカードがこの組み合わせならさっきの一勝を合わせて勝てる。

逆に、負ける組み合わせとすれば。

時任【4】 石居【1】

時任【2】 石居【3】

二択…二枚のカード。

「……………」

スッ

時任、【4】のカードを場に伏せる。

「……………」

石居も真剣な眼差しでカードを見つめ、一枚を提出した。

「それでは…4枚目のオープンを」

開かれる…4枚目。

(【3】だ!!頼む!! 【3】、来い!!!)
祈り、時任がカードを開ける。

時任は 【4】

(……どうだ、石居! 【3】だろ、お前は!!)

…ククク、お前は今祈ってるな? 」

「 ……あん? 」

「 だとしたらズレた祈りだ、祈って場に伏せたカードが変われば世話無いからな 」

「 ……てめえ、うだうだ言ってるねえでさっさとカードを開ける!! 」

「 ……ああ、開けてやる、ほら 」

石居、提出したカードは …… 【1】

「 ……あ 」

ああああああ…。

これにより、4枚目、5枚目の勝負が一気に決まる。

時任 【4】 石居 【1】

時任 【2】 石居 【3】

結果、二勝三敗。

figureカード、一回戦、時任は敗北。

「ククク…これでリーチ」

石居は次勝てば二勝、すなわち…勝利となる。

「…さて、では次の勝負をするか、恐らく最後の勝負となるが」

「…ぐっ」

「可哀想にな…ククク、負けたら連れていかれるぞ」

「…!?」

こいつ、今、何て!?

負けたら…連れていかれる?

第七話：『覚醒』

負けたら 連れていかれる？

「…負けたら、何て？」

「ん？ククク…そうか、知らんのか」

「なんだよ…何が言いてえんだ！てめえ！！」

「このカジノビル、【賭博遊戯】で紹介状を持ち、ゲームに参加し、そのゲームで負けた者はな、黒服に連れていかれる」

「…！？」

んな…バカな。

「俺は…そんな話し聞いてない」

「ククク…甘ったれが、そんなだから連中の遊び道具にされる」

「だって…現に山倉の奴だって負けたのに普通に」

時任は観客に混じる山倉を見る。

「紹介状の期限、覚えているか？」

「…日が変わるまで」

「そう、カジノ側にとってそれまでは紹介状を持つ客、負けた者にとっては…最後の安息の時間だろう」

「…山倉あ」

ガラス越しに山倉を睨み付けた。

「……………」

山倉は顔を伏せ、時任の顔を見ない。

「どこだよ…」

時任は涙目で石居を見る。

「…どこ、とは？」

「どこに…連れてかれるんだよ」

「ククク…さあな、まあ、こんな組織だ、金を回収するやり方なんていろいろあるだろうよ」

回収…、その言葉に時任が身体を震わせた。

「例えば…強制労働施設、奴隷市場、人身売買、臓器販売、薬物実験、まあいろいろある」

「…うう」

「…がく」

時任は椅子にへたりと座りこんだ。

負けたら 連れていかれる。

その先には 地獄。

(ククク…折れたか、心が)

動揺する時任を見つめ、石居の口元が緩む。

(終わったな…クズが、落ちろ…地獄へ)

「では…二回戦を始めます、お互いカードを交換を」

figureカードでは不正のないように一戦毎にカードを交換する。

「クク…どうした？時任君、カードを交換だぞ」

顔を下に向けている時任に石居は余裕の表情で話しかけた。

「…カカカ、まあ、こんなものだろう」

そこは裏カジノの一室。

時任と石居の勝負を映したモニターを見て皆が笑う。

「こりゃあ…決ったな、彼にはもう冷静な判断など出来まい」

「のう…お嬢ちゃん」

その部屋の一同が皆、ただ黙ってモニターを見つめる少女を向く。

「…クスクス まだわかりませんよ、皆様」

だが少女は済ました顔で平然とそう答えた。

「人間…追い詰められた時は二種類に別れます、一つは全てを諦め、絶望に身を委ねる者、そしてもう一つは」

「…交換だ!!」

「…え？」

ずっと顔を下に向けていた時任が顔を上げる。

「…カードの交換だろ、ほら」

時任が自分の持っていた手札を石居の方に置いた。

「…あ、あぁ」

石居も自分の手札を時任の方に置く。

「……………」

時任はそれを受け取り、手札として持つ。

(…こいつ)

その様子を見て、石居

(まだ…死んでない、目が)

「石居…次の勝負だ!!」

俺は…何を考えてやがる。

勝つしかねえって事なんぞ…最初っからわかってただろ!!

「もう一つは…追い詰められた状況にこそ、抗い、真価を発揮する」

言わば…【覚醒】

ギャンブルにおいて、追い詰められた者のあがき。

少女が椅子から立ち上がる。

「おや…どちらへ行くんですかな？」

「ええ…」

黒服に合図をし、部屋から出る。

「…小娘が」

「わしは納得がいかぬ、何故あのようなガキがこの部屋におる…！」

老人が机を叩き、声を荒げた。

「そりゃあ…彼女は条件を満たしてるからね」

それに答えたのは若い男だった。

少女が部屋を出た今、年齢的にはこの部屋で一番若いだろう。

「お前は黙ってる！天馬…！」

「おいおい、俺だって条件満たしてんだぜ？じくさん」

「き…貴様あツ…！」

「…静まれ」

「!？」

中央に居る人物の声に二人が動きを止める。

「ただ黙って勝負を見る、彼女が紹介して来たコレを」

モニターの時任をコレと呼び、その人物は笑う。

「彼は今、今後の人生を賭けた大博打をしているのだ、大博打は良い、例えその者の力量が低くても良いものだ」

「……………」

その人物…恐らくはこの催しの主催者だろうか、その者は言う。

「さて、コレは破滅か…？生還か…？」

「では…二回戦を始めます、一枚目のカードを提出して下さい」

「……………」

黒服の合図で時任がカードを見る。

(こいつ…この一敗の状況、そしてさっきの話しを聞いても、絶望
しやがらねえ)

石居はその時任を見て顔を歪めた。

(生意気な…)

「……………」

時任、手札の五枚のカードを見つめ

スッ

【2】のカードを場に伏せた

「…チッ」

石居もカードを場に伏せる。

「それでは…オープン」

黒服の合図で同時にカードを開けた。

時任は【2】

対する石居は【4】

《一戦目》

時任【2】

石居【4】

「……………」

まず一敗した時任、が…その目には一切の後悔もなかった。

言ってみれば時任にとってこの負けは釣り。

「では…続いて二枚目のカードを」

「……………」

時任…、ここ、ここで【5】のカードに手をかける。

figureカードで重要なのはこの【5】を通す事。

逆に言えば相手が【1】を出さない時を狙うのが重要。

(さっき負けた一戦目…俺は二枚目のカード提出の時に【5】を出した)

その【5】を…今、二回戦目も二枚目のカードとして提出させるなんて相手は考えるか？

「……………」

時任…【5】のカードを場に提出、伏せる。

(まず通る…、この【5】は…)

「…よし、コレだな」

石居も場にカードを提出した。

「…それでは、オープン」

黒服の合図、時任が伏せたカードを開ける。

(今後の展開を考えたら…相手は【3】の方がいい)

そう、後の事を考えながら石居のカードを見る。

【1】

「…え？」

石居のカードは【1】

「…クク、クッククク!!」

「ま…け？」

「クッククク、いや…悪くない、時任君の考えはそう悪くはない」

「…あ、うっ」

「一回戦にはここで【5】を出したから次は出さない、普通はそう考える…が、その考えがダメ」

石居の話しも…恐らくは時任の耳に入っていないだろう。

時任…二回戦目、二連敗。

もう後の無い。

「クク…さて、三枚目の選択　、クク…、いや、最後の選択か」

「……」

最早…その顔に希望は無い。

絶望の渦中。

「さあ…選べ、カード…、命の選択を」

第八話：『崖岸』

二連敗

時任、figureカード二戦目。

一枚目、二枚目…共に敗北。

「…うっ」

もう後の無い三枚目。

負ければ即、地獄行きの勝負。

(なんだよ…なんだよ、コレ…)

嫌だ…、やめたい。

誰でもいい…助けてくれ。

借金なんて地道に返すから…俺を今日、無事に家まで帰らしてくれ…。

頼む。

「クッククク…何を諦める必要がある？君にはまだ【3】や【4】のカードがある、まだまだ一発逆転の道は残っているじゃないか」

絶望の渦中の時任とは反対に石居はにやにやと話した。

「……………」

バカ野郎…

その石居を時任が涙目で睨んだ。

いくら【4】のカードを出したって…お前が【5】のカードを出したら終わりじゃねえかよ…。

そう…石居の残りのカードは

【2】 【3】 【5】

対する時任は

【1】 【3】 【4】なのだ。

石居が【5】のカードを出したら…【3】も【4】も負けなのだ。

(…待てよ、【1】だ、俺もさつきこいつがやったみたいに【1】で【5】に勝てば…)

勝てば…繋がるのだ、微かだが望みが。

(【1】だ…、ここで【1】を出せば)

時任が【1】のカードに手をかける。

が…出せない、そこから先に腕を動かす事が出来ないのだ。

「…クソッ!」

考えてみれば…出せるはずもない。

【1】は相手が【5】以外のカードだと負ける。

言わば自滅…。

時任は恐ろしいのだ…その自滅が。

(無理だ…、出せねえ)

と、なるとやっぱり…

【1】から手を離し【4】と【3】のカードを見る。

この2つのどっちかを出すしか…。

そう考え、すぐにその考えを消す。

(…バカか！だから相手が【5】を出しゃ終わるんだよ、この2つは…！)

出せない…選ぶ事の出来ない三枚のカード。

最早時任は完全に疑心暗鬼。

ああ…、て事はやっぱ、負けるじゃん。

負けて…黒服の連中に連れてかれて、金を回収されて。

地獄 地獄へ一直線。

そう考えた瞬間、時任の身体がふるえる。
恐怖によるふるえ。

「…うつ、ぐつ」

なんだよ…ふるえてる場合じゃねえだろ。

クソツ…止まれ、ビビるなよ!!

が…ふるえは止まらない。

「…なんだよ、おい」

ふるえる時任がカードに手をかけた瞬間。

バサッ

誤ってカードを床にばらまく始末。

「うつ、つわああああ!!」

慌てて立ち上がる時任。

「…あ、あああ」

すぐにしゃがみ込み、散らばったカードを集める。

「ぎゃっははは、何？アイツ？」

「カツコ悪い〜」

その様子を見て観客達が笑いだす。

「カード…カードは、あと一枚!!」

時任は二枚のカードを拾い、涙目で机の下にもぐりキョロキョロと残り一枚のカードを探す。

「…チツ、何やってんだよガキが!!」

石居がそう怒鳴った。

(…うるせえよ…あと一枚なんだよ!!)

そう思った時、石居の足元に残りの一枚を見つけた。

「あつた」

ズガッ

勢いそのまま、頭をテーブルにぶつける。

「あっはははは〜!!」

「クズが、何してんだあ〜？」

それにより観客達にどっと笑いがわく。

(…クソッ!!クズはどっちだよ!!)

時任はテーブルの下でカードを確認し。

(出すカードは…コレ)

一枚、提出するカードを手にとる。

「……………」

そして椅子に戻り、そのままカードを場に提出した。

そして…ただ祈る。

その行為に意味などないのはわかっているのに

「このガキが…だらだらと時間をかけやがって」

石居は怒りを声に上げ、自分のカードを見つめる。

「……………」

そして…やや時間をかけた後、一枚カードを場に提出した。

「それでは…カードをオープンして下さい」

黒服の合図。

figureカード三枚目。

負ければ敗北の三枚目のカード。

(頼む…!!)

時任が祈り、カードを開ける。

時任は【4】

石居は【3】

「…え？」

石居のカードを見て時任が

「う、うおおおお！やった…やったあ！！」

思わず声を上げた。

これで繋がったのだ…首の皮一枚だが。

勝利の希望…。

「たかが一回勝ったくらいでうるせえんだよ！！」

「!？」

突然石居が大声で怒鳴った。

「チツ…クズガキが、まだ自分が崖っぷちだと気付いてねえ」

舌打ちをし、石居は目線を自分のカードにうつす。

「……………」

その石居を見て…時任が違和感を感じた。

小さいが確かな違和感。

(なんで…こいつはこんな怒ってたんだ)

そりゃあ…さっきので勝ってれば勝負はついてたけど。

それでも…今までずっと余裕な顔してたこいつが怒り出してる。

まるで勝てる勝負で勝てなかったって感じに。

(…原因はさっきの三枚目の時か?)

確か…途中から急に機嫌が悪くなった。

ちょうど…俺がカードを落として拾ってた時くらいだ。

(ああ!そっぴやあの時も…)

周りの観客達が俺の不様なありさまを見て笑ってるなか、こいつは怒ってた。

まるで…自分にとってあの行動は都合が悪いみたいに。

待てよ…ひょっとして、いじり。

イカサマ…してんのか？

第九話：『不正』

イカサマ

こいつ…何かやってんのか？

（考えてみりゃ…変だ）

このゲームの経験の差とかそんなんじゃない。

もっと根本的に…何かが違ってた。

俺とこいつは　。

（そりゃあ…そうだ、もともとの立場が違う）

当然　大違い。

相手のカードを知っているのと知らないとは違う。

（…イカサマ、だとしたら考えられるのは）

まず…【ガン】。

カードに印を付けるやり方。

印で俺の出すカードがわかっていた？

（…いや）

【ガン】は今回のゲームではあまり使えないはずだ。

まず、このゲームは一戦毎にお互いのカードを交換するのだ。

それに1〜5までのカードそれぞれに別々の印を付ける事はあまり考えられない。

(…考える、あの時、俺が机の下に居た時の事)

イカサマがあるとしたら、あの時、確かにそれから逃れたのだ。

「!？」

時任の頭に一つの閃きが走る。

(ああ!そうだ…、あの時、このカードを見ていたのは…)

俺だけだ…。

このゲームは透明なボックスの中で行われている。

筒抜けなのだ、観客達からはどのカード出すかが。

つまり…【通し】

誰かが石居に協力し、俺の出すカードを教えている？

(実際…このカードゲーム、【通し】が一番やりやすい)

教えるのは相手が1〜5のカードの内どれを出すかのみ。

…合図は五種類でいいのだ。

五種類ならば難解な合図も必要ない。

手を握っていれば2とか腕時計を見れば5などの簡単な合図でいい。

(…と、なると、俺のカードが見える位置に居る奴らの誰かが)

カードを覗き、石居に教え、石居はそれをいかにも経験のなせる技だというように解説する。

これが今までのずっと行われていたのか…？

(誰だ…俺のカードを覗いて居る奴は)

時任はチラツと後ろを向く。

「……………」

そこで、山倉と目があつた。

(…山倉)

俺は山倉に言われ、このゲーム、figureカードを選んだ。

それが…最初から罠だったんじゃないか？

山倉は石居とグルで、俺をはめる為にこのゲームを紹介した。

それに…こいつは紹介状を持つ者が敗者となった時のカジノ側の対応、いわゆる【連れて行かれる】の事も黙っていたんだ。

奴の言動

奴の行動

全ては…俺をこのゲームに参加させる為の罠。

「……………」

…最低だと、時任は自分に対して思った。

今のギリギリの状態に追い込まれて自分が考えた事はかつての同級生を疑う事だったのだ。

その事に対する自己嫌悪だ。

が イカサマの可能性もあるのだ、その考えをもちろん時任は捨てない。

しかし、相手がもし、【通し】を使っているとすれば。

(対処法なんて…ねえじゃねえかよ)

【通し】は簡単なうえにバレにくい

仮に今、周りの黒服達にイカサマと申告しても取り合って貰えないだろう。

まさか勝負を中断させてビデオカメラなんかで不振な行動をする者をチエックするような連中でもあるまい。

山倉が怪しい、とは考えているがそれも確信ではない。

(…どうする、何か、何か手はないのか?)

起死回生の…一手が。

(今は…信じるしかないのか、山倉を)

懇願する思いで時任は自分の後ろ、観客席に居る山倉を見る。

「……………」

時任の考え。

(…すまん、時任)

正解 だった。

山倉、彼は時任の来る20分前に石居とこのゲームで敗北、連れて行かれる事を聞かされる。

絶望の中、石居が提案したのがこのイカサマ。

『俺とお前でイカサマをしかけるんだよ、勝ったら掛け金の中からお前の借金分、俺が払ってやる』

石居の提案。

山倉がカモをうまくこのゲームに誘い込み、このイカサマゲームに参加させる。

そして…【通し】

(…悪いな、時任、俺はまだ地獄には行きたくない)

山倉の視線は【通し】の為、時任のカードに集中する。

自らが生き延びる為に。

(俺の代わりに地獄に落ちてくれ!!)

山倉は……時任を潰す。

「…ククク」

石居はニヤニヤと時任を見て笑う。

「どうしたあ？時任君、ずいぶん長く考え込んでいるなあ」

「…だっ、黙れ!！」

「…クク、まあゆっくり考えるがいい」

何をしても無駄だからな。

石居の目は時任を見ていない。

その後ろ　山倉。

このゲーム、石居は最初から常に山倉の合図を見てカードを出していたのだ。

時任に何戦か勝たせたのも演出。

(クズが…自分が無力だと気付かない程哀れなクズ)

バサッ…

「…む？」

時任が突然、二枚のカードを自分の膝に置いた。

(…こいつ)

何か…やる気か？

「…どうした、カードを持つのを止めて、降参か？」

もしま…気付いたか？気付いたからこそ、カードを見せないように

膝にやった…？

石居は探りを入れるように話す。

「…違う、降参なんかしねえ」

「…では、なぜカードを持たない」

「持たないんじゃないかねえ、決めるんだ…、俺の出す、最後のカード」

「…ほう」

ククク…やはり、こいつはクズだ。

こいつは自ら、最後のカードと言った。

つまり…半ば諦めている、勝つ事を。

「行くぞ…勝負だ！石居！！」

時任が膝からカードを持ち出す。

「ククク…では、受けてたとう」

そう言い、石居の視線は山倉へ。

「……………」

ふう、膝にカード置いた時には気付かれたかと思っちまった。

山倉の目線は時任の出すカード。

【3】

山倉の目から見える時任の出すカードは【3】

(【3】…か)

山倉は石居に【3】の合図を出す。

「ふむ、俺はこのカードといくか」

その合図を見て、石居の出すカード。

当然【5】

時任と石居が…お互いにカードを場に出したのだ。

決着のつく、四枚目のカード選択。

時任に対しては生き延びるか、地獄に行くかの決着。

(地獄行きなんだよ…クズが)

「それでは…カード、オープン」

同時に、二枚のカードが開かれた。

第十話：『重札』

カード…オープン。

黒服の合図。

（…ククク、山倉の合図ではこいつのカードは【3】）
ならば…、こちらのカードは当然。

石居はカードを開く。

【5】のカード。

（クズが…死ぬ、このカードで…！）

石居は確信している、この【通し】は完璧。

見破れる事のない作戦だと。

「さあ…どうした？時任君、カードを開かないのか」

「……………」

そつ…開けるはずがない。

石居が【5】を出した時点で時任の敗北が確定したのだ。

今、時任の顔は絶望に

「……………!?!」

笑っていた。

にっ、とした表情で。

その表情には絶望の欠片も感じられない。

(な…なんだ、その顔は)

気に入らねえ…。

「残念だったな…石居」

「…何?」

「お前の作は…見破った!!!」

時任が…伏せたカードを開ける。

【1】のカード。

「なっ!?!」

石居にとっては正に想定外の出来事。

「な…なぜ?」

不意にそう口走り、その目線は時任の後ろ、山倉を見る。

「!？」

その一言に時任が確信する。

なぜの後に続く言葉、『なぜ…違つのか』を、その視線が誰を見ているかを。

「教えてやるよ…マヌケが」

時任の手には最後のカード。

【3】のカード。

(!？、こいつ…カードを一度、膝に置いたはずじゃ)
膝に手をやる仕草は無かった。

つまり…これは、最初から二枚、カードを持っていた。

「あつ…ああ!?!」

「やっと気付いたか…マヌケ」

「貴様…重ねてたな、カードを、二枚」

二枚のカードを重ね…見える表側には【3】のカード。

それを山倉に見せ…合図を送らせ。

【1】のカードを置く。

「…黒服」

時任が黒服の一人に話しかける。

「…はい？」

「外に山倉って男が居る…、捕まえてくれ」

「ぐっ!？」

こいつ…気付いてやがる。

「こいつは…イカサマをしている!！」

「なっ…何を馬鹿な事を突然言い出す!！」

時任の言葉に石居が当然反論する。

「黙れ!！」

「ッ…」

「監視カメラとかでチェックしろ!こいつらは【通し】をやってる!！」

「っ…っ…っ!！」

まずい、まずいまずいまずいまずいまずいまずいまずい…!

このままじゃ…イカサマがバレ、俺は…どうなる？

(このカジノの連中が、俺をただで帰すはずがない)

確実に…終わる、俺の人生が！！

「さあ…何してる！早くチェックしろ！！」

「……………」

二人の黒服がぼそぼそと会話をする。

(か…考えろ…、この状況を打破する方法)

石居はその黒服の様子を見ながら頭を抱えた。

「チェックだ…！監視カメラで見ればこいつのイカサマは明白

」

「あらあら…それはいけませんね」

「？」

時任の言葉を遮る声。

「このカジノでイカサマは御法度…、これは嚴重な処罰が必要です
ね」

「…てめえは」

そこには…ゴスロリ衣装の少女が居た。

ボスと呼ばれる、時任にこのカジノの紹介状を書いた少女。

「な…なんだ！！このガキ、どっから入って来た！！」

石居が立ち上がり、少女に怒鳴る。

「……………」

「…うっ」

が、その間に入った少女の付き人らしき黒服の睨みで石居は言葉を失った。

「口の聞き方には気を付けた方がいいぞ…、この方がその気になればお前などすぐに」

「クス あんまり脅しては可哀想ですよ」

「…失礼しました」

少女の一言で黒服がさがる

「クスクスツ まあ…本当にやるとしたら脅しじゃないですけど」

楽しそうにクスクス笑う少女に時任と石居が啞然とする。

(このガキ…やっぱおかしい)

時任…、そして石居も同じように考えたのだろう。

二人が身構えた。

「あ、あの…」

ゲームを仕切る立場のカジノ側の黒服さえ、恐れながら少女に話しかける。

「なぜ…こちらえ？」

「心配しなくて大丈夫ですよ、単なる見物ですから」

「は、はあ…」

「クス…、私に構わず、さあ、どうぞ…三回戦目、引き分けさえなければ決着のつく勝負を始めて下さい」

「なっ…ちょっと待てよ、おい！！」

少女の言葉に時任が当然反応する。

「お前は今さっき来たばかりだから知らないだろうがな！決着はついてんだよ…」

そう…、このままいけば時任は勝利できるのだ。

石居の不正によって。

「イカサマ…ですか？それが本当なら、ですけどね」

「本当だ！監視カメラで山倉の行動を見れば一目瞭然！！」

「あら…それでは面白くないでしょう」

「！！？」

面白くない。

少女の放った、ただ、その一言。

だが…通る。

そう、わかりたくはなかったが時任にはわかってしまった。

さっきの黒服の態度を見ればこの少女にそれだけの発言力があるのは明らかだった。

「…クソッ！！」

どこまで…人を落とせば気が済むんだよ！！

時任が苦渋の表情をする。

「ご安心を…時任さんのお友達の身柄は拘束しました、もし…不正があったとしても、これで邪魔が入る事はありません」

「……………」

なんだよ…わかってて、全部知っててやらせるんじゃないか！！

少女を睨む時任。

「さあ…、早く、三回戦の合図を」

それに気付いているだろうが、少女は無視し、ニコツと黒服に微笑む。

「は…はい！それではfigureカード、三回戦、開始」

「…これで五分五分の勝負ですね」

少女の付き人の男が話す。

「…クス 馬鹿ね」

「…え？」

「いくらイカサマをしていたとしても…経験は圧倒的に相手が上、この差はかなりデカイですよ」

「じゃあ…あのガキ」

「普通に戦えば…ほぼ負け、クス…クスクス」

クスクスと笑う少女。

figureカード、三回戦が始まった。

第十一話：〈小者〉

やった!!

石居が決して表情には出さないが、喜ぶ。

そう…この少女の提案のおかげで石居は命拾いしたのだ。

あのままではイカサマがバレ、無事ではすまなかっただろう。

(やった…生き延びた、生き延びたんだ)

「……………」

その石居を少女は蔑んだ目で見る。

「…当然」

そして口を開く。

「…え？」

「当然、あなたにもリスクを背負って貰わないといけませんね」

「リスク…だと？」

「だって…勝てるのでしょうか？イカサマなどせずとも、それとも…イカサマをしないと勝てませんか？」

「い…いや、イカサマなんてしてない」

「…クス」

少女はクスリと笑い、石居の耳元で

「ヘタクソ…」

「!?!」

…このガキツ!!

「では…あなたが次、三戦目で負けた場合、イカサマをしていた、という事でよろしいですね？」

「…ぐっ」

このガキ…、このガキ。

悪魔か…クソが!!

「では…そういう事で」

「…了解しました」

少女の提案に黒服が頭を下げ、受ける。

これにより、石居、時任、共に後の無い勝負となる。

時任は勝たなければ連れて行かれる。

石居は勝たなければイカサマの処罰を受ける。

「クス… これで少しは面白くなりましたね」

少女は黒服が用意した椅子に座り、観戦の準備をする。

「…とんでもねえガキだ、まるで野球の試合を見るようだが、あれは」

石居がそれを見て小さな声で時任に話す。

「もう気付いてるだろうが…、お前らみたいなクズはあいつら金持ち連中の玩具、遊び道具なんだよ」

「…黙れ、小者が」

「…あ？」

「確かにあのガキら、このゲームの主催者共は鬼畜だ、奴らにとっちゃ俺らは言ってみれば競馬の馬、ポーカーのトランプ、そんな価値」

時任が石居を睨みながら話した。

「だが…お前はどうかんだよ、そんな鬼畜共のゲームを利用して、散々奪って来たんだろ？俺みたいな…紹介状という唯一の希望を持つてここに来た人々を」

ドンッ

拳を机に叩きつけた。

「奪って来たんだ、あの通し…、イカサマで」

「き…貴様、言わせておけば」

「小者だ…、てめえは100%勝てる勝負しかない小者!!」

「…クス、クスクス」

時任の石居に対する言葉に少女はクスクスと笑う。

「三戦目…やったろうじゃねえか、てめえみたいな小者に負けねえ」

そう言い、時任がカードを机に出す。

「ほら！カード交換だろ、お前もカードを出せ」

「ぐうっ!!」

クス！このクスが…

石居は五枚のカードを手元を集め

「……………」

バサッ

「…ほら」

少し間を置き、カードを机に置く。

「よし…」

時任はカードを受け取り、シャッフルして広げた。

シャッフルをしたのは当然、カードの順をバラバラにする為である。

「……………」

ククク…

それを見て、石居が心で微笑む。

100%勝てる勝負しかしない小者…か。

(正解だよ…悔しいがな)

石居の視線は時任の持つカード。

一枚に小さな傷がついていた。

(こいつは今、俺のイカサマを発見し、多少は安心しているだろう、
これでもうイカサマも無い、対等の条件だと)

が、違う、違うんだよ。

【5】のカードに傷をつけた、小さな傷だが…確かにな。

傷…、バレればそれも当然イカサマとして扱われるだろう。

それさえも石居にとっては賭けの一つなのだ。

過去…通しの使用出来ない場面で石居が使ったイカサマ、《ガン》である。

まず…その過去の経験から一つの境界線を作る。

それを越えればイカサマがバレるという線を。

これはそのギリギリの傷。

時任がそれに気付き、黒服に言えば今度こそ命は無かっただろう。

が。

(気付かなかった…こいつは、多少安心している、俺がもう何もやってこないと)

傷をつけたのは【5】のカード、石居は時任が【5】を出す時だけわかる。

だが…この勝負、【5】のカードを【1】で倒せばほぼ勝てるのだ。

(100%ではない…が、まず勝てる)

重要なのは…このまま他の誰も傷に気付かない事か。

「では…まず一枚目のカードを提出して下さい」

黒服の合図、時任が一枚、カードを場に出す。

傷は無い。

と言う事は【5】以外のカードという事だ。

(流石に…一枚目から【5】は出さないか)

石居が自分のカードを見つめ、考える。

石居にとってこのゲーム、figureカード開始から始めて、相手のカードが見えない状態。

さて…どうするか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559d/>

賭博遊戯

2010年10月23日02時00分発行